

# 文化財を訪ねて

—見てある記—

## 絵馬にみる人々の祈り

私たちの国には、願いをこめて絵馬を奉納するという習俗が古くからあります。桶川市内に数多くある神社でも、人々が様々な願いをこめて奉納した古い絵馬が多く残されており、市の指定文化財として保存されているものもあります。こうした絵馬の奉納はいつごろ始まり、どのように私たちの文化に根付いていったのでしょうか。

古代より日本では馬は神聖なものとされ、生きた馬が神様に捧げられてきました。これが、生きた馬の代わりに土や木で馬を象つた「馬形」を奉納するようになり、やがて板に描いた馬、すなわち「絵馬」を奉納するといふふうに変わつてゆきました。絵馬の起源は奈良時代まで遡ることができますが、絵馬が今のようなものになったのは中世の末ころから江戸時代の初めころといわれます。この頃になると、馬だけではなく様々な絵が描かれるようになり、願いを絵馬に託して奉納するという庶民の信仰の習俗となつていきました。

絵馬には大型のもの（大絵馬）と

小型のもの（小絵馬）があります。明確な規定ではありませんが、30cm以上のものを大絵馬と呼びます。大絵馬は、一般的なものとは少し違い、専門の絵師によつて描かれた美術的作品なども多く、画題も参詣の図や武者絵のようなものが見られます。これに対し小絵馬は絵馬本来の意味が残るもので、庶民の生活に深く根付いたものです。

市指定文化財の「桶川宿商家店先絵馬」や「足立坂東観音霊場参詣大絵馬」は大絵馬です。



桶川宿商家店先絵馬  
(市指定文化財)

前者は桶川宿の紅花商人の店先の様子が描かれています。奉納者は上州館林商人米屋勝右衛門と近江商人小泉栄助、利七で、絵師は錦絵北尾系の系統を引く北尾重光です。文久3年（1863年）に桶川宿商人小高家が祀る稲荷神社に奉納された

もので、桶川宿商家の賑わいが描かれています。当時の商人たちの広範囲にわたる活躍を知るとともに、商売繁盛への感謝と変わらぬ繁栄への願いが感じられます。

後者は川田谷の砂ヶ谷戸観音堂に文化3年（1806年）に奉納された足立坂東観音霊場の参詣風景を描いた参詣図絵馬です。



足立坂東観音霊場参詣大絵馬  
(市指定文化財)

場のうちの二十一番札所です。奉納者は地元川田谷狐塚を中心とした観音講中38名で、そのほとんどが女性というたいへん貴重な絵馬です。地元の霊場を描くことも珍しく、当時の霊場参りの風俗や参詣の様子をよく知ることができます。

同じく市指定文化財に指定されているものに「前領家矢部家山王社の奉納絵馬等」があります。これは川田谷の矢部家山王社に奉納された民間信仰資料で、この中に68点の絵馬があります。最も古いものは安永7年（1778年）奉納のもので、

多くは小絵馬で、鷹、猿、拝み、馬など、人々の願いを込めた様々な絵が描かれています。願い事を直接文字で書きこむことが多い現代の絵馬とは少し違いますね。最も多いものは鷹の絵で、これは安産祈願といわれています。拝みや猿の絵馬も多く見られます。



拝み絵馬（矢部家山王社奉納絵馬・市指定文化財）

男性の拝み絵馬は妻の安産祈願、女性の拝み絵馬は妊娠のお礼といわれます。山王権現の使いである猿を描いた絵馬のうち、桃を持った猿が描かれた絵馬は女子の成人を祝うものといわれます。日常の中の大切な願いや祈り、感謝の気持ちを込めて奉納した人々の思いが詰まった文化財です。

絵馬の奉納は、今も昔も変わらず信仰の習俗です。時代の変化に伴い、日常の生活や人々の祈りも変わってきていますが、絵馬に願いを託すという私たちの心の営みは脈々と受け継がれていることがうかがえます。

詳しくは生涯学習文化財課 ☎ 788